

編集後記

■原稿の集まり具合は、初めちよろちよろで、ちょっと心配されたが、終わってみれば色々な切り口から盛り沢山の原稿が集まった。投稿者の多い会報となり、まるでこの総合雑誌のような感もある。●千葉県では、野生のきのこをスーパーで見かけることは、稀である。ただし、他県か外国産のマツタケを除いて。2015年に南房総市のスーパーで「房州マツタケ」と書かれたものが3パック売られているのを目撃した。もちろん、中身はバカマツタケ。値段は、5個ほど入って3千円前後。2日後にカメラを持って行ったところ、半額の正札が貼られて2パック残っていた。通りすがりの奥さん曰く「あら、マツタケとシイタケの・・・みたい」。(山) ■関西でベニタケ類を調べている下野義人さんに伺った話。分子系統の結果をみると、日本のベニタケ類で、欧州のものと同種とされてきたものは、ほとんど別種なのだという。つまりは、日本産だけを考えても、ものすごく沢山の(少なく見積もっても百種以上の)種類を新種記載しないといけないのだという。安藤洋子さんに伺ったホウキタケ類の状況も、同様に未記載種だけで、片端から記載して片付けないといけない状態らしい。しかし新種記載のためには学術誌に投稿する必要がある。投稿すると査読にまわされるのだが、査読者も、真面目で几帳面な人ほど、馬鹿丁寧な査読となる(よいことではあるのだが)。そうすると新種が片付くスピードにも限界がある。本郷先生のように1年間に10種というようなペースで記載していても、おいつかない。学生さんを、横にならべて、せーので、記載をはじめても、なかなか、片付かない。記載し新種にする方法について、特にベニタケ類やホウキタケ類など、何か、別の方法を考えないといけないのかもしれない。今回、本の紹介のところで案内した「南西日本菌類誌」、いろいろ意見はあるのかもしれないが、査読を経ずに、クオリティを保ちつつ、本としてとりあえず世に出すという方法は一つの解決策なのかもしれない。(光) ■2016年は「おそ松さん」がブームになりました。クローンの六つ子の「おそ松くん」が50年もの時間を経て再び「繁栄」を勝ち取ったその現象に、生物と同様の時代への適応と進化を見る思いでした。ぐだぐだな「リニューアル」ですが。(ま) ■明治「きのこの山」発売40周年、紅白仕立てりんご味。紅白仕立てでもベニテングタケ風にしないのは、食品製造会社のご配慮かな。3月発売の「チョコかけすぎました 大粒」に、はじめて‘新種発見!!!’の文字。千葉でも新種続々にわくわく。(公) ■桜も戸惑う寒暖の激しい春でした。薄れた記憶を辿っての行事報告…。至急後継者求む！(悦)

□本誌に加え、ホームページへのご意見や感想などもありましたらお聞かせください。またご要望も受け付けております。(事務局)

ISSN 1881-9230

千葉菌類談話会通信 32号

CHIBA MYCOLOGICAL CLUB BULLETIN NO. 32

2016年3月

発行 / 千葉菌類談話会

編集 / 千葉菌類談話会編集幹事

千葉菌類談話会事務局

〒260 - 8682 千葉市中央区青葉町955-2

千葉県立中央博物館 吹春気付

ホームページアドレス <http://homepage2.nifty.com/chibakin/>